

援助要請行動における葛藤についての検討

○米田朋加¹・西まゆみ²・橋本博文²

(¹安田女子大学大学院 文学研究科・²安田女子大学心理学部)

目的

普段の生活の中で抱えきれない悩みを抱えたとき、まわりに助けを求めること（援助要請）がある。不登校傾向の生徒に対する予防的介入として、援助要請の促進が重要であるとされている（風間ら、2013）ことから、援助要請は問題の深刻化を回避するための方略のひとつと考えられる。援助要請を行わないという状況において、「援助要請したいけれどできない」か「援助要請したくないからしない」かでは、その意味が大きく異なるだろう。本研究では、援助要請における実際の行動と理想の行動との間で生じる葛藤について検討を行う。また、そうした葛藤に関連する要因として援助要請への印象を取り上げることとする。

方法

調査対象者 女子大学生 189名(平均年齢 18.78歳)
 質問項目 ①援助要請行動：悩みを抱えたときの実際の行動について「援助要請する人」と「援助要請しない人」に関する記述を読ませ、どちらのようにふるまうかを「援助要請しない人(1)」から「援助要請する人(8)」までを8件法を用いて尋ねた。同様に、悩みを抱えたときの理想の行動について、できることならどちらのようにふるまうかを8件法で尋ねた。②自他の印象：「援助要請する人」に対する「自分が抱く印象」と「周りの人が抱くと思う印象」を8件法で尋ねた。同様に、「援助要請しない人」に対しても8件法で尋ねた。

結果

援助要請における実際の行動と理想の行動についてそれぞれ理論的中央値からの有意性検定

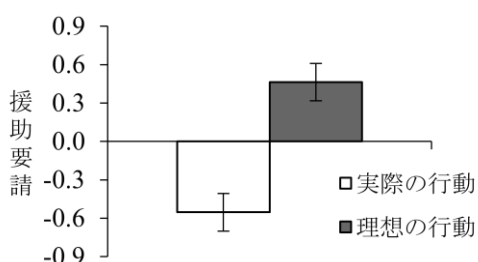


Fig.1 援助要請の実際と理想の行動。理論的中央値(4.5)を引く形で、マイナスの値が援助要請しない人、プラスの値が援助要請する人をとるようにスコア化した。

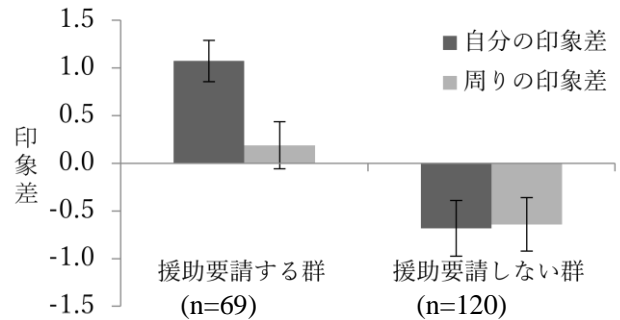


Fig.2 実際の援助要請ごとの自他の印象差評定。「援助要請する人」に対する印象から「援助要請しない人」に対する印象を引いた印象の差を求め、援助要請する人に対して良い印象を抱くとプラスの値、援助要請しない人に対して良い印象を抱くとマイナスの値をとるようにスコア化した。

を行ったところ、ともに有意な差が示された ($t(188) > 3.17, p < .01$) (Fig.1)。このことから、援助要請をしたいと思っても、実際には援助要請を行っていないことが明らかとなった。

次に実際の行動得点から調査対象者を援助要請する群と、援助要請しない群の二群に分けた上で、援助要請する人としらない人に対する自分の印象差と周りが抱くと思う印象差の得点について、ゼロからの有意性検定を行った (Fig.2)。その結果、援助要請する群の自分の印象差、援助要請しない群の自分の印象差と周りが抱くと思う印象差で有意差が示された ($t(119) > 2.60, p < .05$)。このことから、実際の行動として援助要請しない人たちは、自分と同じ行動に好印象を示していること、また、自分の周りが援助要請しない人に対して好印象を抱くと思っていることが示された。

考察

本研究の結果より、援助を求めるかどうかの状況におかれた時、援助を求めたいが実際にはできないという葛藤を抱える人がいることが明らかとなった。援助要請への介入を考える上で、まずは介入が必要な状態を明確にする必要があると考えられている（水野、2017）。この点において、潜在的に援助要請を行いたいと考えている人に対する具体的な介入の検討を行うために、本研究の知見は重要な視点であると考えられる。